

除くと、あまり語られることはない。晩唐五代において、韓愈はなによりも堂々たる儒家的士大夫であり、不遇な知友や後輩を推挽する救世主のごとき文壇の領袖として語られている。一方、彼の個別の詩歌作品に対する影響や反応はほとんど見られない。

この点を賈島と比較すると、見事に好対照である。賈島の伝記的エピソードはほとんど虚構によって固められているが、作品は晩唐五代の時代、確実に熱狂的に支持され多大な影響力をもっていた。こういう好対照な両者が堅く結びつけられたのが、『鑑戒録』の生まれた五代である。この事実の意味することについて、本発表では韓愈と賈島の両面から考察する。

並木栗水による三島中洲批判

本学21世紀COEプログラム研究助手 岡野 康幸

明治十九年十月十日、本学学祖三島中洲は学士院会館に於いて「義利合一論」を講演する。その内容は義（正しさ）と利（利益）は本来一つのものであり別々ではない。後世宋儒によって義と利が判然と二つにされてしまった、という主旨である。そしてこの考え方は中洲自身により「脩身衛生理財合一論」と展開され、また中洲と親交のあった洪沢栄一により「道德経済合一説」として発展していった。そして研究の上でもこの三島・洪沢ラインはそれなりに今日に於いても研究されている。

しかし、この「義利合一」という主張に真向から反対する意見に対する研究は、管見の及ぶ限り無きに等しいと思われる。

本発表で扱う並木栗水（一八二九～一九一四）は、この中洲「義利合一論」に正面きって反対した漢学者である。栗水の意見によれば義と利は別々のものであり、中洲の主張は「人欲ヲ認メテ天理トスルモノニテ、功利説ヲ主張シ、以テ時好ニ投ツルニ過キサルノ論ナリ」（『義利合一論辨解』序）として反論する。

本発表では並木栗水『義利合一論辨解』を通して、栗水・中洲の義利認識の相違を浮かびあがらせていきたい。